

仙台の40代男性、相談窓口23日開設

悩みや不安を抱える認知症患者の相談に、認知症患者が答える全国でも先駆的な取り組みが仙台市内で始まる。物忘れ相談窓口「おれんじドア」を5月下旬から月1回のペースで開設。認知症への誤解や偏見に苦しむ人を勇気づける大きな一歩になると専門家は期待している。

相談窓口を開くのは仙台市泉区の会社員丹野智文さん(41)。30代半ばから物覚えの悪さを自覚するようになり、39歳の時に若年性認知症と診断された。患者同士が支え合うことで「不安と一緒に乗り越えられたら」

「不安を乗り越えた方々の元気な姿を見て前向きな線に立ち、生きる希望を取り戻すために役立ちたいと決断した。

認知症

「ネット」で『30代』『アラソハイマー』などと調べると、数年後は寝たきりになるとか暗い話ばかり。心配で仕方なかった」。丹野

丹野さん(41)は、30代半ばから物覚えの悪さを自覚するようになり、39歳の時に若年性認知症と診断された。患者同士が支え合うことで「不安と一緒に乗り越えられたら」



おれんじドア開設に向けて開かれた実行委員会

体験語り悩み共有 生きる希望取り戻そう

主体的に参加し、後押しする。考える会によると、認知症患者が相談を受けるのは全国的に例がない。

初回は23日午後2～4時に仙台市青葉区の東北福祉大ステーションキャンパスのカフェで開く。毎月第4土曜日に同じ場所と時間帯で実施する予定。今のところ6月27日と8月22日の開催が決まっている。

丹野さんが体験を語り、患者同士が交流、個別相談にも応じる。家族の相談には考える会の専門家が対応する。個人の特定を懸念する参加者に配慮し、匿名参加も受け付ける。

「認知症という言葉に惑わされずに、悩みを傾聴できるのは当事者本人」。認知症ケアに取り組む清山会医療福祉グループ(仙台市)代表の山崎英樹医師は言う。医師などの専門家とさえ偏見から自由でないこともあるという。

山崎さんは「当事者でない」と癒やせない不安はある。ぜひ多くの方に足を運んでほしい」と話している。

連絡先は事務局070(5477)0718＝平日午前10時～午後3時＝。